



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 20 号

発行日 2019年3月10日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

陽光

わたしは春の光が好きだ

世界中の抒情を歌いあげたような

ゆたかな空から降りそそぐ

春の陽光がわたしは好きだ

わたしは春のおいが好きだ

地中から生のよろこびがはじけ出るような

おだやかな息づかいの

春のおいが好きだ

たまご色の光のさざ波に

めざめよ 野辺の花々

花模様のレースを編め！

シンフォニーを奏でる風のオーケストラ

光の鏡にうつる清い^{こわね}声音

わたしが好きな春のメロディー

夢

うす暗い空の町を出発し

国道7号線を南下する

孫らと新潟の下宿の下見に行くのだ

助手席のわたしはナビゲーター

目標物を心に記していく

南下するにつれ

暁を明るくする光の粒子

パールグレイの海は

ふかく色を装いはじめる

橋は見知らぬ街を

人をつなげる

孫は遠くの景色に目をやり

未知の空間を充溢させている

不動産屋の

あつぼつたい緑の淀みには

赤く 小さい 小鈴のような花

古の土器のように

燃える心で

孫は建築家への

厳しい夢のドアを開けた

土偶の祈り

「古代発見！ バスツアー」の募集 無料

伊勢堂岱遺跡と縄文館 大湯環状列石とストーン
サークル館を巡る一日コース

ガイドの説明を聞きながら縄文時代に思いをさせる
ストーンサークルは祭祀のための場所という
配石された石の一つひとつに神を敬う縄文人の
聖なる祈りが込められているのではないか

今日の目的は縄文館の笑う岩偶 最近秋雨のよう
な淋しさにところが濡れていた だからにっこり
笑う岩偶のお顔を拝みたいと思った 笑う岩偶は
ショーケースにちょこんと座っていた が少しも
笑っては見えなかった パリに貸し出し中……

レプリカだ！

やむなく他の土偶を見てまわる 展示された48体
の土偶の人気コーナーもあった シンボルの板状
土偶 宇宙人のような遮光器土偶 のつぺり虫顔
の腕を折り曲げた土偶 写実的な美男子の土偶

個性的な土偶が並ぶ そのうちの1体に目がとま
った 高さ14センチの右腕や右足が欠けている土
偶 悲しそうな表情 なぜか切り口はゆがんでい
ない 壊されたのか？

《身代わりとなって作られ ヒトと同じ傷む箇所
を故意に壊して 痛みを土偶に移す呪いらしい》
いまで言う「イデドゴ イデドゴ トンデイゲ〜」
という呪いなのかもしれない

それにしても高い鼻に大きな胸 縄文の別嬪さん

だ 首から肩にかけての文様も素敵だが 円形の突起文は邪気を払う穴のようにも見える 土偶でなにを表現しようとしたのだろう

《土偶は縄文人の体を写したのではなく 精霊を宿した仮の姿 つまりヒトではなく精霊といふ》

妊娠中なのか お腹の大きい土偶もあるし 乳房が突き出ていて女性らしい

《十分な医療がなかった時代 出産は命がけで亡くなる乳幼児は多かった だから希望の土を捏ねて 土偶に多産や安産の無事を託したらしい 突き出た胸や膨らんだお腹は妊婦の生命力にあやかるうとしたもので 土偶はヒトの願いとつながっているという》

土偶の眼窩のおくを覗いていると なんだか引き

こまれる 土偶の宇宙なのだろうか 渦巻いている

いつしか鳥瞰しているわたしがいる どうやら時の螺旋をたどり縄文時代にきているようだ 川がある小高い丘の上に竪穴住居が見える 川で魚を捕っているヒト 獣を追っているヒト 土器で煮炊きしているヒト 縄文人は風をよみ獣のにおいを嗅ぎ豊かな自然のなかで生活しているようだ

《縄文人は山神・海神など自然を敬っていた 秩序と調和を大切にして素朴な生活をしていた 階級はなく 災害があつた時は力を合わせて立ち向かっていった 大きな戦争はなく平和に暮らしていたらしい》

なぜ縄文時代が一万年以上もつづいたのか 不思議だった 自然とともに生きる社会 自然との共生が時代の長命を保ったからなのではないか 鳥の目で俯瞰すると 眼窩のおくに見た渦巻きは環

状列石だったのだろうか 縄文回廊にわたる古色の風が わたしを染める

わたしたちは 縄文の女性が産んだ子どもたちが
未裔ではないだろうか 何代にもわたって受けつ
がれてきた縄文人の純真でたくましい魂が わた
しのなかにもあるのではないか いまのわたした
ちは縄文人とたしかにつながっているように思え
る

「もうすぐ着きますよ」 ガイドの声が快い夢をさ
えぎる 縄文の世界にそつと触れるような夢をみ
ていたわたしの空虚なところは 明るく笑う岩偶
のようにあたたかいもので満たされていた

* 秋田県埋蔵文化センター主催

平成30年度第一回「古代発見！バスツアー」
に参加して。

* 《》は当日の資料、その他による。

徒然のエチュード 17

①

人に聞いてはいけないもの

年齢

体重

サイズ

年金額

わたしが聞かれたくないもの

詩は

もうできた？

②

孫は縦に成長

私は横に成長

機嫌は斜めに成長

③

彼女は

十二歳から詩作

あれから半世紀

彼女は消えてしまった

が

ことばの色艶は

残っている

④

に入る感じ漢字は？

鳴館

の子

蝦夷

真男

⑤ 年をとると
いやなこと
思いわずらうことなど
ぜくんぶ 体で吸収して
へビーなボディーにします

⑥ 目にしたら
なにがなんでも
やらないと気がすまない
難易度 ★★★★★★
の
ナンプレ

⑦ 忠義な犬は 忠犬
忠義な猫は 忠猫
忠義な武士は 赤穂四十七士
忠義な愛を貫くお方は
だれ？

⑧ どう生きたか
なんて関係なく
秤は
年月を計る
誕生日がくると
体重計の体内年齢も
間違はなく
一歳ふえる

第一回「ピッタの会」講師

『ピッタインダウン』第二〇号に寄せて

前田 勉

矢代レイさんの個人詩誌『ピッタインダウン』が第二〇号を迎える。創刊号は二〇一五年四月三〇日。約四年にして二〇号を発行するというのは、矢代さんの熱意と努力そのものにほかならず、口癖のように話される「学びたい」という姿勢が形として表れたものだと言える。そして、この熱意は詩誌発行にとどまらず、二〇一七年四月からは『ピッタの会』という名で勉強会を主催し、昨年で四回目を数えた。回を重ねるごとに市民の皆さんも参加されるようになってきたと聞く。また、二〇一七年一月には、交流のある方との共同展『詩・絵手紙展』を身近な銀行の支店を会場に開催した。これもまた新しい形での詩表現だと気づ

かされた。

なぜ個人詩誌なのだろうか。創刊号には次のように記されている。《最近のわたしは、「詩」の枠を超え、自由に詩作を試みたいと感じてきました。(略) 詩の国の深い霧の中で、ゆらめきながらも、言葉の底にひそむ表情を追い求めたい、わたしを待っていてくれる詩に近づきたい》と。どこかストイックな感じさえするが、この希求心を形にして自らを確認していくのだとすれば、やはり個人誌でなければ無理である。《わたしを待っていてくれる詩に近づきたい》と言える人はそうそういない。＼待っていてくれる＼と言いつつそんな熱を帯びた人もそうそういない。うらやましいともすごいとも言いつつ、ただただ敬服するばかりである。

位置づけをきつちりと設定し目的化する人は一般的に強いのだが、反面、脆くもある。だが、かと言って矢代さんにそんな風なところは見えない。連作の「徒然のエチュード」は機転を利かせた一

面を出し、そして代名詞ともなった「濁黒（KURO）」は一四二編が発表され、見事にひとつのステージを閉めた。

更にこの「濁黒（KURO）」について言えば、主眼的には自身の底流を探り吐露し自らを解き放すことであつたと思われる。その視点と方向性、表出力、つまりは詩としての在り方にどう対峙するか大きな葛藤があつたのではないだろうか。本人にとってこの連作は大きな山を越えるための重要な過程であり、そして自身の詩に対する接近を成した作品群であつたかと思う。そのように捉えると、この連作を可能にしたのは『ピッターダウン』という発表の場を持つていたからだとも言える。《「詩」の枠を超え、自由に詩作を試みたい》との意図がうまく作用しているようだ。

『ピッターダウン』も矢代レイという詩の書き手も、自ら定めた次へのステージへ歩を進めた。向後どう展開するのか楽しみである。

第二回・第四回「ピッターの会」講師

白鳥

成田 豊人

何度かなごり雪が降り

公園はまだうつすら冬をまとい

小さな湖は暗い緑色のまま

水鳥の姿のない水面に時おり漣が走り

遊歩道を歩きながら足が滑ることもある

ここを散歩して

いつの間にか三十五年が過ぎた

真冬 吹雪に抗つて歩く時もある

向こうの木々の間に人影がにじむ

やがて ジョギングの少年が鋭い眼つきを見せ

擦れ違った時

青い風に気圧される

足裏に少し疲れを感じ

見つめ合うしかなかった

遠い日の別れが甦る

言葉の力に気づかないまま

唇を噛み締めていただけだった

あれからも時間はひたすら過ぎ去り

濁った記憶が堆積したまま

まだ何も 本当のことを

語ろうともししていない

愕然となり

ベンチにやつと腰を下ろし

膝をさする

少し暖かい湿った風が吹く日

何の前触れもなく

湖は白鳥で埋め尽くされ

幾重にも響く鳴き声は猥雑さを極める

翌朝 再び嬉々として訪れると

薄緑色の湖面は沈黙したまま

白鳥の姿は一羽もなく

夥しい羽毛がただあてなく漂っている

ふいに視線を感じ 見上げると

空のずっと深い所で誰かが手招きしていた

第四回 「ピッタの会」 講師

木陰と斜影

十田 撓子

踏み潰された銀杏の匂い

丸い実

ゆるやかな上り坂の道

上りきったところで左に折れると
わたしたちは下りはじめる

そのまま歩いていくと

元の場所に戻る

このあまりに単純な

循環路を

逸れずにいたのに

弟はいつのまにか居なくなつた
わたしは姉であることをやめた

ふたりは耳を塞いでしまった

声がしても

もう知らない

【あとがき】

「ピッタの会」は昨年で四回を数えた。今号では、これまで講師としてお迎えした皆さまにご寄稿を依頼し、ご協力くださった方の作品を掲載した。

優れた詩人の作品は、筋肉あることばを使つて書かれ、読み手をグツと魅了する。

*

心奥に沁みこんだタール色の粘液を、詩のキャンバスに直情的にぶつけた「濁黒」は、前号で一区切りをつけた。

「ピッターインダウン」を一方的に送りつけられる読者には、至極迷惑だったに違いない。

ことばにしえなかつた黒い濁りは、いまもって立ち現れるが、何とか最後まで書き終えることができた。励ましてくれた方々に、心からお礼申し上げます。

【ご案内】

第五回 「ピッタの会」 勉強会

講師に若木由紀夫氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。

演題は、「詩歌をめぐる問題、課題を一緒に考える」です。質問コーナーを設ける予定です。

ご参加をお待ちしております。

日時 五月十二日（日）

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は、五月五日（日）までに、矢代レイにご連絡下さい。

☎ 090・1935・1180

